



根岸 子規庵 だより

第4号
2026.03.15
発行

寄稿

夏草の涯て

詩人・批評家
多摩美術大学名誉教授

平出隆



二〇一〇年、歌人岡井隆さんとの何
度目かの対談は、子規をめぐるものだ
った。冒頭、いきなり訝しげに、「大体
不思議なんですよね、平出さんがなぜ
正岡子規か」と尋ねられた。自分でも、
なぜだったか、と思いつながら、それは
野球ですね、と答えていた。向いの人

は、「そうか、野球ね」と相好を崩した。
一九八九年春に上梓した『ベース

ボールの詩学』は、数年をかけて一章
ずつ、あちこちのメディアに発表して
九章を構成したものだ。全体は、
一八八八年秋から翌春にかけて、シカ
ゴ・ホワイトストッキングスの監督兼
投手だったA・G・スポルディングが
世界一周の興行を企てた話を軸に、
ベースボールと詩の同一性を証そうと
した本である。船でハワイをめざし、
次にオーストラリアに向っていた彼ら
が、いつそのこと、と途中で世界一周に
切り替えた。不埒と蛮勇に満ちた遠征
の記録に寄り添っていくと、インド洋

を経てエジプトへ向う彼らが、もしも
船先を日本へ向けていたらというあり
えない夢想が一瞬脳裡を掠めた。その
時期とは、まだ学生だった子規が、上
野や神田あたりで実践に打ち興じてい
た、まさにその頃だったからだ。

それはまた、最初の咯血の時期でも
あった。実践から遠ざかりながらも子
規は、地獄にも広いところがあります
か、と閻魔様に問いかける執着をみせ
た（啼血始末）。十年後にはボールが空
に舞い上がってから人の手の中に落ち
てくる様を短歌に詠んだが、これは空
中でボールを掴むことと詩の言葉を捕
まえることは相似たと説いたホイット
マンに通じる。アメリカの野球揺籃期
から説き起した私の書きものは、必然
的に日本における野球の詩学の濫觴を
子規につないだ。そして、子規におけ
る野球の最後のイメージとして、子規
庵の病床から見える遠い野原の夢幻の
眺めに筆が及んだ。

当時すでに、私もまた野球に打ち興
じていた。私の子規論は、監督してい
たチームの選手たちにも結構読まれ
て、鬼を相手にしても野球をやるぞと
いう子規の口吻が伝播していた。あれ
からやがて四十年。納会で「雨雪闇鬼
と仲良く球遊び」（三子男）というよう
な句を詠んでいたナインもぼつぼつ
と鬼籍に入り、ほんとうに賽の河原で
野球をやれるものなのかと、私自身、
心許なくなっている。七十五になつて
も、突き指など重ねながらろうじて
息子や孫の世代のチームに混ぜても
らって、毎週のように同じ杉並のグラ
ウンドに立っているのだが、そろそ
ろ、子規が見ただろう子規庵の病間か
らの景色がちらつきはじめてきた気
がしないでもない。

夏草やベースボールの人遠し

子規



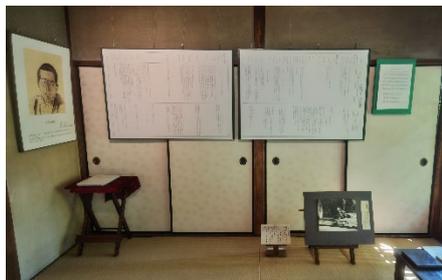
レポート1

2025年糸瓜忌 特別展示 「戦災を乗り越えた遺品達」

2025年9月3日（水）から28日（日）まで、糸瓜忌イベントを開催し、多くの皆様にご来庵いただきました。

昭和20年4月の子規庵焼失から80年の節目にあたる年、近年の修復工事で確認された子規文庫蔵（土蔵）の焼夷弾痕や、戦火をくぐり抜け焼失を免れた子規遺品を特別に公開しました。

糸瓜棚には3年ぶりに元気な糸瓜がいくつも実り、貴重な子規ゆかりの品々とともに、ご来庵者の皆様の目を楽しませてくれました。



レポート2

子規も好きだった
ホットココアを
プレゼント

子規庵蕪村忌句会の 資料展示



与謝蕪村の命日である旧暦12月24日にちなみ、明治30年から子規庵で始まった蕪村忌句会。子規と門人たちが集まって句を詠み、風呂吹き大根を食べ、庭で写真を撮るこの会は、子規没後もしばらく続きました。子規庵では2025年12月6日～2026年1月14日に、明治の蕪村忌句会の資料を病室兼書斎の六帖にパネル展示し、12月20日（土）21日（日）には子規の好物ココアを感謝を込めてふるまいました。

朗読イベント「谷川俊が子規庵で読む」を開催

レポート3



2026年1月14日（水）、俳優の谷川俊さんとギターリストの平木登直さんをお迎えし、子規随筆朗読イベントを開催しました。谷川さんは舞台・映像の両分野で活躍され、繊細な語り口と豊かな表現力に定評のある俳優です。当日は、言葉の息づかいや情景が立ち上がるような朗読を披露してください、参加者の皆さまからは「子規の声が聞こえるようだった」といった感想が寄せられました。

また、谷川さんの朗読に寄り添うように奏でられた平木さんのギターの色は、庵の空間に柔らかな広がりを与え、子規の文章世界をより深く味わうひとときとなりました。

「子規庵で花を活ける 2025」 6組が子規庵を花で飾る

2025年10月23日（木）から11月30日（日）まで、東京文化財ウィークの企画事業として、季節の花の展示イベントを開催しました。各週木曜の活け込みから日曜（月曜祝日の場合は月曜）の撤収まで、6組の活け手が季節の移ろいを作品で表現し、庵内に彩りを添えました。（敬称略）



10月 23日～26日 國風華道会 龍前行雲



10月30日 ~11月3日 根岸花ふじ フラワースクール



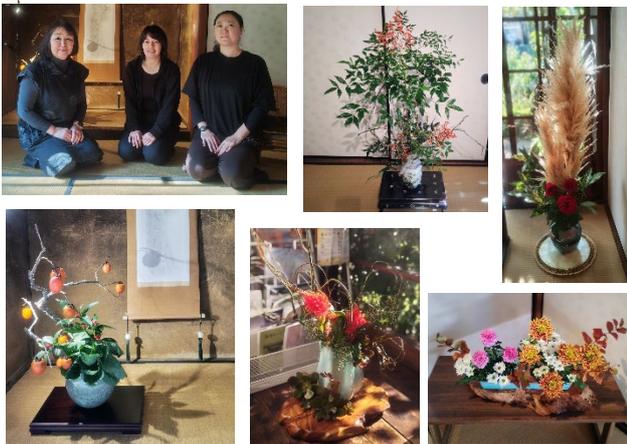
11月 6日～9日 根岸花ふじ 小幡昌広一門



11月 13日～16日 いけばな小原流 林社中 林有為子、土屋弘子、塩川陽子、村井千代子、樋口裕子



11月 20日～24日 いけばな小原流 畔蒜博葉、木村理沙、大川真喜子



11月 27日～30日 草月流 渡辺社中 渡辺瑞春、高森千雀、浦田瑞栄



子規に絵具をくれた人のお話 ①



「正岡君とは、初めて逢った時から、肝胆相照らす処があつて、何事によらず相談相手となつて貰つた。」と、自伝に中村不折は書いています。不折が子規庵の向かいに書道博物館を開いたのは昭和十一年、七十一歳の時ですが、子規との出会いからお話ししましょう。

明治二十七年三月、子規が編集長を務める新聞「小日本」の挿絵画家として浅井忠に紹介されてやつてきたのが一歳年上の不折でした。神田淡路町「小日本」の狭い編集室で、四、五枚の画を見た子規は、即座に優れた画家であると見抜いたそうです。

小日本と関係深くなりて後君は淡路町に下宿せしかば余は社寄りの帰りがけに君の下宿を訪ひ面談を聞くを樂とせり。

「墨汁一滴」

余が不折君のために美術の大意を教へられし事は余の生涯に幾何の愉快を添へたりしぞ、若し之無くば数年間病牀に横はる身のいかに無聊なりけん。

「墨汁一滴」

新聞の挿絵は、連載小説以外当時ほとんど無く、「西洋風の画で失敗すれば、次は日本画と云ふ風に、随分いろ／＼な試みを試み、失敗に失敗を重ね漸やく幾分が見られるものが描けるやうになつた。」と不折は言います。子規はこの新進気鋭の画家からどれほど多くのものを得たことでしょうか。二人が急速に親しくなつた一つには、西洋画家である不折が少年時代に南画を習い、大人になつてからも趣味として手放さなかつたことを思います。子規もまた、不折たちから西洋画について学ぶ前、南画に非ざれば画に非ざると南画を愛していたのです。（南画は江戸中期から盛んになつた画の流派。主な画家は池大雅・与謝蕪村など）

おそらくこの出会いがその後の二人の人生を大きく変えていったと思われれます。西洋画家の不折がなぜ「書家」と呼ばれるようになったのか。次にお話ししたいと思います。

海老名香葉子氏のご逝去を悼む

昨年十二月二十四日、海老名香葉子氏（以下女将さんと呼ばせて頂く）が逝去された。

女将さんには、根岸と子規庵が発展する為ならと様々な協力と励ましを頂いた。落語好きの子規・漱石に因み子規庵で寄席を開きたいとご相談に伺つた際にも、快くプロデュースを引き受けて頂き、「糸瓜寄席―子規庵で落語を聴く会―」を始めた。会の命名と子規（四季）に因んだ年4回の開催も女将さんのご提案である。糸瓜寄席にはご長男の林家正蔵師匠を始め、多くの落語家の皆様にご出演頂いた。

ご多忙な中で、ご自身の戦争体験から二度と戦争の悲劇を繰り返してはならないと、七十歳を超えてから慰霊碑と「時忘れじの塔」の建立に奔走、毎年慰霊祭を開催され戦争の愚かさを訴えられた。その行動力とエネルギーには尊敬の念しかない。

戦火により焼失した子規庵だからこそ、我々は子規庵保存活動を通じて女将さんの思いを引継ぎ、地元根岸の発展と戦争反対を訴えて行く。生前の様に八帖の縁側に座られて庭を眺める女将さんを思い出しながら。

子規庵保存会 代表理事 田浦徹

子規庵の維持・保存活動にご協力をお願いします

- 「子規庵宇宙の会」は、庵の営業や敷地内整備業務、イベント等を実務支援する公認ボランティアの会です。
 - 「子規庵友の会」は、会費の半分が子規庵保存会に寄付され、財政面から子規庵を支援する会です。
- ※各入会手続きは、子規庵内申込手続き、またはHPから申込書を印刷、郵送申し込みで承ります。

子規庵のイベントや
運営情報を発信中

フォローを
お願いします！！

